ミンガド・ボラグ著『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』の真相

ソイルト

「スーホの白い馬」は内モンゴル・チャハル地方に昔から伝えられてきた民話である。これは今でも地元の老人たちの記憶に刻まれ、彼らの証言だけでも十分証明できる。私はチャハル地方フブートシャルの出身で、「スーホの白い馬」を子供の頃からよく聞かされて育った。叔父のロブサンバルダン（故人）は遊牧民でありながら、民話を伝承するプロの芸人でもあった。それゆえ、よく四弦の胡弓を弾きながら「スーホの白い馬」だけでなく、モンゴルの様々な民話や童話、さらに「ジャンガル」「ゲセル」などの英雄叙事詩を含む幅広い内容を語っていた。要するに、子供だけを対象にするのではなく大人たちも家畜の世話が終わったら皆が一か所に集まって叔父の弾き語りに耳を傾けたものである。その風景は今でも子供の頃の美しい思い出として記憶に深く刻まれている。

私が「スーホの白い馬」を聞いていたのは大体1964～1966年頃だったと思う。その頃には漢語（中国語）で出版された書物がチャハル地方やシリンゴル草原に広がる可能性は低かったと言えよう。なぜならば、その時代には漢字を読むモンゴル人があまりいなかったからである。しかしながら1966年からは文化大革命の政治闘争の嵐が吹き荒れ、漢語がモンゴル高原に一気に浸透することになるのである。

叔父のロブサンバルダンがもし今生きていれば84、5歳になっているだろう。叔父も4、5歳の時にデンベレル爺ちゃんから「スーホの白い馬」を聞いていたとよく言っていた。叔父が「スーホの白い馬」を聞いていた年代は今から80年も前で、1940年代になる。塞野が「スーホの白い馬」を聞いて整理・翻訳したのは1950年代である。つまり、これだけで10年も遡ることになる。

「デンベレル→ロブサンバルダン→私」という順番で三世代に渡って「スーホの白い馬」を聞き、語り、伝えてきた。このようにお年寄りから次の世代に伝えられてきた物語は口承文学にほかならないだろう。もし、デンベレル爺ちゃんも子供の頃「スーホの白い馬」を聞いていたとすれば、更に5、60年遡ることになる。このようにたどっていけば、「スーホの白い馬」は19世紀、あるいはもっと遠い昔まで遡る民話になるのではないか。

日本ではあまり報道されていないのだが、ここ数年、内モンゴルにおいてモンゴル語教育の禁止、モンゴル語出版物の制限、言論統制など「文化的ジェノサイド」が見えない形で実行されており、非常に厳しい状況になっている。現在、特に少数民族としてのモンゴル

人は一般的なことでさえも漢人（中国人）に向かって強くものを言うことができなくなっている。「民族文化を大切にする」という当たり前の要求さえできない。その理由は、身の安全にかかわる問題だからである。それゆえに現在、チャハル地方に民話「スーホの白い馬」があったのかどうか、その内容に関してインタビューするため人に自由に会って話を聞く可能性はゼロに等しい。人々は怖くて距離を置いてしまうのである。聞き取り調査自体が当局に疑いをもたれる恐れもある。このような恐怖の中、話をして協力してくれる人々はかなりの勇気のもち主である。今回は特に地元の協力者の安全のため、録音・録画をしないという条件で話をしてもらった。現地の人々に迷惑をかけない配慮をするのが前提である。なぜ「スーホの白い馬」の聞き取り調査にこれほど慎重な態度を取るのかというと、ミンガド・ボラグ氏の主張が「『スーホの白い馬』はモンゴルの民話ではなく、漢人の塞野やその編集者らによって新しくできた」ということがある。塞野にしろ編集者にしろ皆漢人である。そのため、それに反論することはすなわち「漢人を否定する」ということになり、民族団結を敵にした民族分離主義という冤罪をかけられる恐れがある。自分の主張が正しくても、自由な発言ができない恐怖社会である。その現実は、平和な社会に生活している日本人にはわかるはずもないだろう。

ミンガド・ボラグ氏はもしかすると恐怖社会の厳しい状況をチャンスだととらえ、意図的に塞野のストーリーを引っ張り出して、モンゴル口承文学の原点として理不尽に主張し美化したのではないだろうか。その政治手法をも計算に入れて「スーホの白い馬」を真っ向から否定するストーリーをつくったのではないかと疑わざるを得ない。その意図は事実を歪曲するためであるかも知れない。

今後、民話「スーホの白い馬」について地元で聞き取り調査した結果を順次発表したいが、先ずは聞き取り調査に協力していただいた勇気ある年配の方々に心から厚くお礼を申し上げたい。

「スーホの白い馬」の原点は、整理・翻訳した塞野ではなく、チャハル地方だと主張したい。そのため、フブートシャル、ショローンチャガーン、ショローンフフ、タイウスなどチャハル地方を中心とした60～90代の方々に直接または間接に聞き取り調査を行った。その他、スニド、ウジムチン、アワガ地方、また、フルンボイルなど他のアイマグやモンゴル国の方々も含まれている。

取り敢えず聞き取り調査に協力していただいた年配の方々をイニシャルで挙げておく

(1) フブートシャル・ホショー（旗）：R（83歳）、Z（83歳）、M（66歳）、E（72歳）、Z（77歳）ほか。

(2) ショローンチャガーン・ホショー：D（94歳）、O（71歳）、A（77歳）、D（83歳）、D（71歳）、T（80歳）ほか。

(3) ショローンフフ・ホショー：E（61歳）、B（60歳）、B（76歳）、L（77歳）、S（66歳）ほか。
(4) タイウス・ホショー：A（68歳）、B（80歳）、N（74歳）ほか。
(5) モンゴル国：I（72歳）、T（75歳）、D（80歳）、A（74歳）ほか。

調査ではできるだけ幅広い証言をとることを心がけた。これら身近な証言だけでもチャハル地方には代々伝えられてきた「スーホの白い馬」が存在することが証明されているだろう。

もちろん、口承文学の特徴として語り手によって内容には多少の違いがあるものの、基本的には日本に伝わる『スーホの白い馬』と同様である。それが整理されたものだとしても、塞野の漢語訳も元の物語をほぼ忠実に翻訳したと言えよう。但し『スーホの白い馬』の訳者である大塚勇三も塞野の漢語訳をそのまま翻訳したのではなく、モンゴル語のオリジナルをも参考にした可能性が高い。“wangiin ordon（ワンギーン・オルドン）”という言葉で説明したい。塞野の漢語訳ではこれを「王爺府」としており、大塚の日本語訳では「町」としている。「ワンギーン・オルドン」は行政府を指す言葉で、その周辺は少し賑わった町ができている。チベット仏教が浸透したモンゴルには仏教寺院がつきもので、日本語の「町」という訳語は少しもおかしくないだろう。「町」と言っても必ずしも大きいとは限らず、現在でも日本人がモンゴルの村に行けば「町」と呼ぶのである。

『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』には、根拠を示さない説明や解釈、作り話のようなものが多々ある。例えば、家畜が好んで食べる牧草、「スーホ」という表記に関してなどである。これらに関してはモンゴル国立農業大学の元教授や経験豊かな遊牧民の長老、内モンゴル大学の言語学者H教授が指摘し反論されている。そのうち公表されるだろう。

モンゴル国文化学術功労者でモンゴル学博士のダシニャム教授は、蓮見治雄東京外国語大学名誉教授（故人）の親友であり、蓮見教授に数回日本にも招聘され共同研究をしている。ダシニャム教授は、馬頭琴奏者チ・ボラグ、歌手ラースレンら芸術家の訪日公演に2、3度同行したこともあり、小中学校で公演する度に生徒の前で必ずと言っていいほど「スーホの白い馬」を朗読していたそうだ。ダシニャム教授は一度、蓮見教授から「大塚は私の友人で、よく知っているよ。大塚はモンゴル語も少し分かるんだ」と言っていたそうである。また「大塚は『スーホの白い馬』を漢語から翻訳したものの、漢語訳だけではなくモンゴル語で伝えられている「スーホの白い馬」をも聞いているだろう」と言ったそうである。

しかしながら、ボラグ氏の主張では『スーホの白い馬』の原点はチャハル地方の先住民であるモンゴル人ではなく、モンゴル語も理解できない、モンゴル文化も知らない、ただ「スーホの白い馬」を整理・翻訳した漢人の一人塞野だったのだ。

そして、ボラグ氏は四苦八苦してやっと塞野と巡りあって大変喜んだ。「スーホの白い馬」

の源流が見つかり、モンゴルの口承文学の奥深い謎が解かれて光が見え、使命を果たしてほっとしたようだ。上記のようにその内容には様々なバリエーションがあるものの「スーホの白い馬」がチャハル地方の民話だと言われていることには間違いはない。それにもかかわらず、その源流を同地域のモンゴル人に求めるのではなく、それを整理・翻訳した一人の漢人塞野に求めた。なぜそうしたのかという疑問が当然ながら自然に湧いてくるのではないだろうか。疑問があまりにも多すぎる。

私もボラグ氏と同じ環境で中国による本末転倒とも言うべき教育を受けて育った。その私が『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』の真相を分析してみると、同氏の主張は中国の「特色文化」を十分に生かして自分なりに作ったストーリーにすぎないのではないのだろうかと疑われる。「特色文化」というのは、都合のいいように事実を歪曲するものである。都合によって白を黒、黒を白と言うようなことは当然であるのが「特色文化」である。ないものをあるかのように、あるものをないかのようにいくらでも解釈・捏造できるのが「特色文化」である。中国の現状を知っていれば理解できるだろう。

例えば、馬頭琴奏者チ・ボラグ氏がある小学校で演奏会を開いた時、女生徒の一人に「スーホの白い馬を弾いて下さい」と頼まれて途方に暮れたという話である。私は1980年代後半から、チ・ボラグ氏の訪日公演にずっと付き添い手伝ってきた。演奏曲目は当然知っており、「スーホの白い馬」として常に“Yanzganzootoi saaral mori（ヤンズガンゾートイ・サーラル・モリ）”を少しアレンジして演奏していたのである。だから、チ・ボラグ氏が小学生にリクエストされて途方に暮れたということはあり得ない。念のためチ・ボラグ氏に直接電話して確認したところ、そんな話はなかったという答えであった。

また、物語のタイトルに関してボラグ氏は「白い馬の物語」「馬頭琴の伝説」という二つのタイトルを挙げている。チャハルではこの物語を“Morin huuriin ulger（domog）- Suhiin saaral mori”と呼ぶのが通常である。要するに「馬頭琴の物語－スーホの白い馬」とセットで言う場合が多い。ボラグ氏の言っているタイトルもチャハルでは聞いたことがない。

さらに、モンゴル人は馬に対して特別な感情を抱いている民族なので、どんなに悪い人でも馬を弓矢で殺すことはないと主張しているが、モンゴル国で馬をつぶしてよく食べていることはどう説明するのだろう。越冬が難しいと判断された年取った馬、乗用していた馬が年を取ったら屠殺するのである。とりわけ、ブリヤート・モンゴルでは、日本の信州や九州のように馬肉をよく食べている。

五種類の家畜の由来に関する言い伝えや子供の慰めなどに関しても、彼の出身地であるショローンチャガーンの人々も含めてシリンゴルなど幅広く遊牧民やモンゴル国立農業大学の教授にも確認した。その誰もがこのような説を知らないと回答している。

ボラグ氏曰く「内モンゴルでは『スーホの白い馬』を知らなかった。聞いてはいなかった。

日本で聞いて驚いた」というのは、あまりにも滑稽な話ではないだろうか。同氏がチャハル地方の文化についてすべてを知っているとは限らないだろう。

『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』は意図的に作ったストーリーで、それを正当化するためにないものをあるかように語ったに過ぎないだろう。これは日本の読者にあまりにも失礼で馬鹿にしているのではないか。「日本人はモンゴルに関してどうせ何も知らないだろう」「まかり通ってしまうだろう」という計算があったのではないだろうか。本書は学術とは程遠いものである。読者の皆さんはこの点には十分注意を払っていただきたい。

民話「スーホの白い馬」で描かれる馬頭琴の由来には、モンゴル口承文学の特徴として善悪の内容が盛り込まれている。王様の理不尽な略奪行為、スーホが大事な馬を殺され失うというストーリーは善と悪の表現である。これは1950年代の中国の階級闘争とは何の関係もなく、それよりもずっと以前から伝えられてきた民話であり、偶然一致したにすぎない。このことをボラグ氏は意図的に利用したのではないだろうか。階級闘争と無理矢理に結び付けていることが明白である。これを正当化するには、ないものをあるかのように、その根拠を創作するしかなかったのだろう。

ボラグ氏の主張では、チャハル地方の民話「スーホの白い馬」の素晴らしい内容は実際には存在せず、1950年代に塞野の筆だけでもなく、実際には真っ赤になるほど修正した漢人編集者によって作られたものであり、中国階級闘争を反映した新しい作品という話になる。要するに「スーホの白い馬」はチャハル地方の民話ではなく、あくまで階級闘争を反映させた作品だったという言い分である。

「特色文化」を多少理解できる者としては、同氏の主張に深い意図と計算が隠されているのではないかと疑わざるを得ない。記録をあまり残さなかったモンゴル文化であるが故に、モンゴル語で出版された「スーホの白い馬」が存在するかどうかは確かに未知である。しかしながら、今ご健在の80代、90代の人々の証言が得られるのは不幸中の幸いだと言えよう。それは、1950年代よりも遡って1940年代もしくは1930年代にも「スーホの白い馬」がチャハル地方に伝えられていたという事実が生の証言で証明されるからである。

日本人には理解が難しい文化がある。それは「生きる道」「出世する手段」として正当化するために意図的に作れば良いという文化である。大きなスケールで言うと、都合の良いように民族文化を変えてしまう。それだけではなく世界中に知られている歴史さえも変えてしまうのである。それが「特色文化」である。例えば、3年ほど前にフランスのある都市が内モンゴル博物館と「モンゴル帝国のチンギス・ハーン展」を共催することになり、その準備を進めていた。しかし、そのモンゴル展は開幕寸前に突然中止になる騒動があり、世界的にも大きなニュースとして取り上げあげられた。最近のニュースなので、もしかする

と皆さんの記憶にも残っているかも知れない。中止となった理由は「チンギス・ハーンはモンゴル帝国ではなく中華帝国の皇帝である」という主張である。内モンゴル側から突然「中華帝国」に変更するよう要求されたのである。そのため「モンゴル帝国のチンギス・ハーン展」は開催準備ができていたにもかかわらず、フランス側は歴史の捏造となるという理由で変更を拒否し、モンゴル展は結局中止となってしまった。要するに、モンゴル帝国のチンギス・ハーンはあくまでも中華帝国の皇帝であり、元朝のフビライ・ハーンもモンゴルではなく中国の皇帝であるという主張である。こうして歴史までも捏造してしまうのが「特色文化」である。

「特色文化」は真実とは関係なく、真実でなければ「真実」として自ら捏造すれば済む。白と黒、是と非をごちゃ混ぜにするのである。生きるための手段としても使われるものである。

ボラグ氏は日本に来るまで民話「スーホの白い馬」の存在さえ知らなかったと言っている。しかしそれは、ボラグ氏が知らなかったにすぎず、チャハル地方の一部の文化が存在するか否かを判定する根拠にはならないだろう。同氏の言い分には反論すべきことがあまりにも多い。同氏が知らなければモンゴル文化ではないと否定するのはあまりにも理不尽な解釈であろう。

モンゴルの口承文学として世界的に知られている「ゲセル」「ジャンガル」など英雄叙事詩も善と悪の戦いを表現している。それも中国の階級闘争の反映だと言うのだろうか。

モンゴル民話「バルガンサン」も善と悪との戦いである。地域によってその内容は様々であるが、私の出身地では貧しいが利口な少年が王様の処罰をうまく逃れて、王様を巧みに騙して犬の糞を食べさせたり馬鹿にしたり民衆を助けたりして民衆を喜ばせる話である。中国の階級闘争とは何の関係もない。同氏は次の著作で「バルガンサン」も中国階級闘争を表現した漢人の新しい作品だと言うつもりなのだろうか。

ボラグ氏は「スーホの白い馬」を否定するため、日本人と戦った勇気ある漢人塞野との接触、そして、架空で作り上げた編集者が真っ赤にするほど修正した校正以外、その他実際に得た根拠はあまりにも乏しいと言えよう。

(1) 事実とかけ離れた作り話で溢れている。例えば、チ・ボラグ氏の演奏時の話など。

(2) 何人か地元の人を対象に調査したかのように書いているが、厳密に言うとその調査と本書の内容は無関係なようである。

(3) 馬に関する解釈にも作り話が多い。例えば、裸馬はバランスが悪く速く走れないが、鞍を付け人を乗せた馬はバランスが良くより速く走れるため逃げた馬に必ず追い付くということはない。これについては一般の遊牧民や農業大学の研究者に確認している。

（4）フィクションとノンフィクションを混同した解釈も多く、本末転倒である。要するに現実社会と空想社会に関してあまりにも理解できていない。

（5）モンゴルの文化について根も葉もない解釈をして書いている。例えば、五種類の家畜の由来に関する言い伝えなど。

ミンガド・ボラグ氏に対して改めて厳しく言うと、モンゴル文化の否定はあまりにも無責任であり、道徳にも欠ける問題であろう。モンゴル文化は正しく紹介されるべきである。「スーホの白い馬」は昔からモンゴル・チャハル地方に伝えられてきた民話である。

日本の研究者が『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』の真相を見抜くことができなかったのはとても残念で、モンゴル文化に関する知識・研究の未熟さを物語っているのではないだろうか。日本社会において何の指摘も忠告も受けず、学術的に評価されたことはあまりにも情けない。

上記のような理由があったために『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』を内モンゴルの地元で発表できなかったのではないだろうか。

「スーホの白い馬」はモンゴル人の語り手によって内容が多少違うものの、私が知っているだけでも2種類のバリエーションがある。基本的には日本で愛読されている『スーホの白い馬』と同様の内容をもつものが主流である。もう一方は、スーホが親に捨てられた子馬を草原で拾ったのではなく、金持ちの牧主に雇われ馬群の面倒を見ていて、無事に越冬させた褒美に馬群の中から一番元気がなく一番痩せたサーラル・ダーヒタイ・ダーガ（冬毛が抜けていない二歳馬）をもらう、というものである。物語の後半はほぼ同じ内容である。

「スーホの白い馬」は特にフブートシャルで言い伝えられている名作童話であり、舞台芸術にもなっている。

日本全国童話朗読会という組織があり、「スーホの白い馬」は子供に一番人気があり、朗読者も一番読みたくなる童話だと聞いたことがある。モンゴル人にとっては嬉しい限りだ。「スーホの白い馬」はモンゴルの口承文学・民話として日本に於いて広く紹介され、日本人の心に刻まれた名作だと言えよう。「スーホの白い馬」は絵本に留まらず、唯一小学校二年生の国語の教科書（光村図書出版）に採用されており、子供から大人まで愛され続けてきた名作である。その意味でも「スーホの白い馬」は日本人とモンゴル人の心の絆であり、日本とモンゴルの精神的な文化交流の懸け橋にもなってきた民話である。モンゴルの口承文学・民話として「スーホの白い馬」ほど日本で広く紹介され、根付いたモンゴル文学の作品は他にはないだろう。それにもかかわらず、なぜかその存在さえ知らなかったボラグ氏は「モンゴル人」としてどういう意図で先祖から伝えられてきた「スーホの白い馬」を否定したのか、氏の本当の目的は何だろうか。日本で愛読されている「スーホの白い馬」を徐々に日本人の心から切り離して教科書から削除させる、モンゴル文化を消し去るためなのか、

疑問は多い。

「スーホの白い馬」を歪曲したことはモンゴル民族に対しては当然ながら、日本の「スーホの白い馬」の愛読者や「スーホの白い馬」を愛読している子供たち、そして今日まで愛読して育ってきた多くの日本人にとってもショックであり、大変失礼なことだと言えよう。そればかりか「スーホの白い馬」の愛読者の心に与える傷も大きい。

同氏の意図・目的がどこにあり、その見通しはどうであったのか追及したいものである。

(1) 漢人が書いた、もしくは編集したということにしておけば、内モンゴルのモンゴル人は反論できない。

(2) 内モンゴルのモンゴル人は政治的弾圧を恐れ、身の安全を考えて真実を言えず嘘を暴露できないため、日本人は同氏の捏造に疑問をもたず、反論もできないという判断をしたのではないだろうか。

(3) 漢人が「スーホの白い馬」を書いたということにしておけば、内モンゴルのモンゴル人が反論すれば、漢人を否定する罪になり得る。場合によっては反革命・民族分離主義のレッテルを張られる恐れもある。それを恐れるモンゴル人は反論できないという判断をしたのではないだろうか。

『日本人が知らない「スーホの白い馬」の真実』はつい最近やっと一部の人々に知られるようになってきた。それを聞いた地元チャハルの人々は同氏に対して怒りを爆発させている。その怒りの証言を資料として保存してあるので、そのうち順次発表したい。その生の声と憤りが日本社会に届くのも時間の問題であろう。

東京外国語大学名誉教授である蓮見治雄先生（故人）は、モンゴル口承文学・民話を長年研究した学者である。3年前に入院先の病院で蓮見教授はボラグ氏の著作に関する産経新聞の記事を読んで大変驚いていた。「この人は本当にモンゴル人なのか。彼の知らないことはモンゴル文化ではないと言えるのか。彼がモンゴル文化を代表しているわけではないだろう。ただの無知だ。悲しいね。日本にせっかく紹介された名作なのに、モンゴル人自身が自らの民族文化を否定するなんてあまりにも無責任で信じられない。スーホの白い馬は日本国民に愛され続けられている類まれな名作だ。ほかにはない。根も葉もない嘘で簡単に否定できるはずはないだろうが、ショックは与えるだろう。悲しいことだね…」。そうおっしゃっていた蓮見先生の言葉の重みが脳裏からずっと離れない。蓮見先生は大塚勇三氏のことを旧知の友人だとも言っていた。「もし大塚さんが生きていたら、きっと怒るよ」と苦笑いしながらおっしゃっていたのが心に焼き付いている。

蓮見先生は「スーホの白い馬に関するモンゴル語・漢語の資料が自宅に何冊かあるはずだ。きちんと根拠を示してボラグ氏に反論しよう。退院したらすぐに何か書くから」と約束してくれたものの、残念ながら先生は退院できずに亡くなってしまった。大変残念である。

「スーホの白い馬」は小学校二年生の教科書にも採用されているあまりにも有名なモンゴルの民話である。日本の子供たちにも夢と勇気を与えてきた名作である。最後に、ある日本人の感想文を紹介して筆をおきたい。

「私も小学校の頃に教科書で読んだ記憶はありましたが、今回初めて絵本で読んでみて、こんなにも悲しいお話だったのだなと知りました。貧しい羊飼いの少年スーホが拾った一頭の白い馬。大切に大切に育てていたのですが、とのさまの開く競馬の大会で一等になったのに、貧乏な羊飼いだからという理由で不当な扱いを受け、馬をとられ、最後には弓でうたれ、殺されてしまうのです。最後に、スーホの夢に白い馬が出てきて骨や皮を使って楽器を作るように言われたことから、楽器を作り、この事から馬頭琴が生まれたとかかれていました。殺されたままで終わるのではなく、楽器としてでもスーホと白い馬は近くにいることができたことに救われる結末でした」。